

全国学力・学習状況調査について

1. 調査の目的

- 国が、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- 各教育委員会、学校等が、全国的な状況との関係において自らの教育及び教育施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- 各学校が、各児童生徒の学力や学習状況を把握し、児童生徒への教育指導や学習状況の改善等に役立てる。
- 児童生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力や生活に目標を持ち、また、それらの向上への意欲を高める。

2. 調査実施日

令和5年4月18日（火）

3. 調査の対象

泉佐野市立第二小学校 第6学年，全児童

実施児童数（113人）

4. 調査の内容

(1) 児童生徒に対する調査

ア 教科に関する調査

- (ア) 小学校調査は、国語及び算数とし、中学校調査は、国語、数学及び英語とする。
- (イ) 出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は、それぞれの学年・教科に関し、以下のとおりとする。
 - ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
 - ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等
- (ウ) 調査問題では、上記①と②を一体的に問うこととする。出題形式については、国語及び算数・数学においては、記述式の問題を一定割合で導入する。英語においては、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」に関する問題を出題し、記述式の問題を一定割合で導入するとともに、「話すこと」に関する問題の解答は、原則として口述式によるものとする。

イ 質問紙調査

調査する学年の児童生徒を対象に、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査（以下、児童を対象とする場合は「児童質問紙調査」、生徒を対象とする場合は「生徒質問紙調査」、児童及び生徒を対象とする場合は「児童生徒質問紙調査」という。）を実施する。

(2) 学校質問紙調査

学校における指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する質問紙調査（以下「学校質問紙調査」という。）を実施する。

※平成29年度より、文部科学省から示される都道府県の平均正答率及び市町村の平均正答率は、整数となっております。

令和5年度全国学力・学習状況調査の分析（国語）

1. 全体の傾向

- ・平均正答率の全体的な分布状況は、全国より9.2%下回っている。学習状況調査においても、国語が役立つかについても、全国より4.2%低い。
- ・しかし学習状況調査によると、国語の勉強は大切だと思っている児童は、91%を超えており、大切であると思う意識がある一方、自分の文章の良いところを見つける項目は61%となっているので、継続した授業改善が必要である。 平均正答率（本校 58／泉佐野市 62／大阪府 66／全国 67.2）

2. 学力状況調査より（本校正答率/全国正答率）

国語	特徴がみられた設問	
<p>○文と文との関係についての理解に課題がある。 1一：文と文がどのような関係にあるか、適切なものを選択する。(49.5/64.7)</p> <p>○話し手が伝えたいことと自分が聞きたいことの中心をとらえることに課題がある。 3一：インタビューで聞き手が話し手に質問をした理由について、適切なものを選択する。 一 (60.6/73.6) 二 (61.0/74.0)</p>	<p>○目的や意図に応じて話の内容をとらえ、自分の考えをまとめることに課題がある。 3二：文章を読んでわかったことを、条件に合わせて書く。(54.3/70.2)</p> <p>○敬語の使い方に慣れていない、または習得できていない。 3三：敬語の使い方をまとめた【谷さんのノートの一部】の空欄に入る内容として適切なものを選択する。(44.8/57.6)</p>	

3. 学習状況調査より

質 問 項 目	本校	全国	10%○ 5%◇	差
国語の勉強は好きですか	53.4	61.5	◇	8.1
国語の勉強は大切だと思いますか	91.5	94.2		2.7
国語の授業の内容はよくわかりますか	79	85.7	◇	6.7
国語の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に役立つと思いますか	88.6	92.8		4.2
国語の授業で、書いた文章の感想や意見を学級の友達と伝え合い、自分の文章の良いところを見つけていますか	61	71.1	○	10.1

- グラフやもとになる文を自分の言葉でまとめることや字数制限のある文章を書くことに慣れる。問題文の読み飛ばしなどないように、じっくり読んで理解させる。
- 語彙力が低く、設問の内容がイメージできてないと考えられる。様々な文章や出題方法に慣れること。語彙力を増やすことが正しい読みや正答に繋がると考えられる。
- 「想像することが難しい」「考えることが苦手」という児童や、「考えは持てても、何をどうやって書けばいいのか悩む」という児童が多い。また、「字を書くこと、読むこと」など基本的技能に課題をかかえる児童も一定数いる。以上のことから、基本的技能を培う取り組みを継続するとともに、児童が「したい!」「やりたい!」という課題設定と「この力がつくとういうことができるようになる」という児童への丁寧な説明をより行っていく必要があると考える。

令和5年度全国学力・学習状況調査の分析（算数）

1. 全体の傾向

・平均正答率は全国正答率分布グラフを見ると、全国の分布と似ているが0, 2, 3問正答など低位層の分布が全国・大阪分布に比べるとやや高くなっている

平均正答率（本校 57／泉佐野市 59／大阪府 62／全国 62.5）

2. 学力状況調査より（本校正答率／全国正答率）

算数	特徴がみられた設問
<p>○与えられた数字を使って短絡的に立式して誤答を導いている</p> <p>1（3）伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて記述できるかどうかをみる(49.5/55.5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基準量を明確にせず、問題を解こうとしている。 ・与えられた数字が何を意味しているのかを考えず、短絡的に立式して誤答を導いている <p>○図形の基本的な定義についてはおおむね理解できているが、条件が複雑化すると必要な条件を選んで記述することに課題がある</p> <p>2（3）正三角形の意味や性質について理解しているかどうか(20.0/24.9)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・角度が60度ということは理解できているが、その半分の大きさを問われていることに気づかず誤答となる （4）高さが等しい三角形について底辺と面積の関係を基に面積の大きさを判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかを見る(15.2/20.8) ・三角形の面積公式を理解できていない ・底辺、高さの定義が明確になっていない 	<p>○グラフを読み取ったり、二つの表やグラフを見比べて違いや条件に合う数をみとったりすることに課題がある</p> <p>4（3）</p> <p>示された棒グラフと複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み、見いだしたちがいを言葉と数を用いて記述できるかどうかを見る(38.1/56.2)</p> <p>（4）</p> <p>二次元の表から条件に合う数を読み取ることができるかどうかを見る(47.6/64.6)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見慣れない形の表やグラフを読むことが難しく、正しく読み取ることに課題がある。 ・終盤の記述問題ということもあり、無回答率も全国に比べて高くなっている

3. 学習状況調査より

質 問 項 目	本校	全国	10%○ 5%◇	差
算数の勉強は好きですか	32.4	34.8		2.4
算数の勉強は大切だと思いますか	75.2	75.3		0.1
算数の授業の内容はよくわかりますか	51	45.2	◇	5.8
算数の授業で学習したことは、将来社会に出たとき役に立つと思いますか	79	73	◇	6

○朝学の効果も出ているのか、基礎的な部分は理解できているところが多い。しかし「知識」としてある程度の力はあるものの「活用」「思考」の力に課題があるため、記述問題への苦手意識が強い。

○提示される情報を紐解いて回答したり数字の意味を明確にして問題に取り組んだりすることに課題が残る。そのため問題の情報量が多くなると、必要な情報を選んで解答することが難しい。

○計算領域に比べると、図形領域の理解・定着に課題が残る。繰り返し計算問題に取り組む機会を朝学で補充しているのと同様に、図形に関しても積み上げを意識した学習が必要であると感じる。

令和5年度全国学力・学習状況調査の分析（児童質問紙より）

設問内容種類別の全国との比較で差が大きく特徴のある項目

設問内容種別	本校の状況	本校 < 本校回答率 / 全国回答率 >
【家庭生活の様子】	<p>○自分に自信がある児童の割合がやや低い。</p> <p>○朝食を毎日食べていない児童が多い。</p>	<p>○自分には、よいところがあると思いますか。 (〈69.5% / 83.4%〉)</p> <p>○朝食を毎日食べていますか。 (食べていない割合) 〈14.3% / 6.1%〉</p>
【家庭学習の様子】	<p>○地域行事への参加意識が低くなっている。</p> <p>○地域のことを深く知る機会が少ないので、知ってもらいたいと思う気持ちも少ないことが予測される。</p> <p>○土・日曜日の家庭での学習状況が2極化しており、家庭での学習環境に差がある。</p>	<p>○今住んでいる地域の行事に参加していますか。 (〈47.6% / 57.8%〉)</p> <p>○日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいと思いますか。 (〈68.5% / 78.1%〉)</p> <p>土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強していますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む） (2時間以上勉強している子の割合) 〈30.4% / 24.7%〉 (全くしない子の割合) 〈25.7% / 13.8%〉</p>
【学校での学習の様子】	<p>○授業でICT機器を使う場面が全国に比べて少ない。</p> <p>○学級会をひらき、話し合いの機会が全国に比べて少ない。</p>	<p>○総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。 (どちらかという当てはまる) 〈55.3% / 74.8%〉</p> <p>○あなたの学級では、学校生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか。〈63.8% / 77.2%〉</p>

本校の取組

◎これまでの取組

本校では、ここ数年「言葉を大切にし、自ら考え、自ら表現し、伝え合う子どもを育てる」という研究主題を掲げている。また、3年前より、大阪府教育委員会から「スクール・エンパワーメント学校推進事業（確かな学び【TM】）」の指定校として研究を進めてきた。そして、今年度は、「国語の授業づくりモデル校」として1年目を迎える。

2020年度の「論理的な思考を育む～説明文を中心に～」の研究の中で、重視したことは、説明文の内容や構造を大きくとらえるための思考ツールとして、元筑波付属小学校の二瓶弘之先生が紹介する『説明文の家』を使うことを教職員間で共通理解し、説明文の構造把握の際に積極的に、取り入れた。また、「単元計画シート」を活用して、「単元のつきたい力」「単元のゴールの言語活動」というゴールからの逆向き設計をし、単元計画を構想していった。そうすることで、子どもたちからは説明文の構造理解がわかりやすくなったという声がきかれた一方で教師主導になりがちな授業が課題点に挙げられた。そのため、子どもたちが「主体的に学ぶ力」を育むことが大切だと共有した。

そこで、2021年度は、「主体的に学びに向かう力」をつきたい力と定め、「主体性」を引き出す授業づくりの研究を行った。その際、下記に述べる「主体的な学びを育む授業づくりの3つの視点」を意識して授業の計画を行った。

- ①子どもたちの「したい!」「やりたい!」を引き出しているか
- ②「教師がする」を「子どもがする」にできないか
- ③子どもたちに『子どもたち自身の学び』が見えているか

これら3つの視点を大切にしながら、研究授業や相互参観、個人レベルの実践を行っていった。その結果、「子どもが意欲的にやりたい活動なのか」「教師が一方的に話していないか」「支援が必要な児童はどうしたら参加できるか」などの視点で、教師自身が主体的に悩み話し合い工夫する姿が見られた。

2022年度は、「主体的・対話的に学ぶ力～自ら課題を見つけ、自分の考えをもち、伝え合う中で深めていく～」をつきたい力に設定した。「主体性」に焦点化した研究に加え、「説明文の学び」を全教科・さまざまな活動へ広げた。子どもたちはそれぞれの学習の中で、意見と根拠や理由を意識した文章を書いたり、「はじめ・中・終わり」を意識し相手により伝わるように話したりして、これまでの2年間の学びを活かすことができた。しかし、子どもたちが「自分の考えを豊かに表現し、意見を聞き合う」授業づくりにはまだ至っていない。なぜなら、子どもたちは、「これを伝えたい」という主体性が弱く、書くことに対して苦手意識が強い児童が多くいる。その原因として、文章記述の基礎基本の定着の不十分さ、何よりも日常的に文章を書く習慣が身につけていないことと考える。

これら3年間の積み上げの成果と課題から、今年度の研究の重点として、

- ①自ら課題を見つける力、②自分の考えをもち、豊かに表現する力、③自分の考えを伝えあう中で学びを深めていく力の育成について研究していく。とりわけ、「書くこと」を通して自分の考えを豊かに表現する力を育てていくことにした。

そのために、「書く活動」を軸にした国語授業づくりを進めていく上で以下の3点を意識していくことを教員で共通認識した。

①「したい!」「やりたい!」を引き出す授業づくり

子どもたちの「したい!」「やりたい!」を引き出す授業づくりで、子どもと意見交換しながら課題設定やめあてをつくる。

②「書くこと」の過程を意識させ、『ゴールイメージ』を持たせた授業づくり

書くことの領域の1つ1つの過程（「題材の設定」「構成の検討」「考えの形成・記述」「推敲」「共有」）を

子どもたちに意識させるように「見通し」や「ポイント」を共有し、子どもたちが「書きたい!」「表現したい!」と思う手立てを工夫しながら進める。

③評価基準の明確化

評価基準を明確にし、だれが授業を見ても評価できるようにする。またどんな工夫や支援をしたらそれぞれの評価に到達していくのかも考え、指導と評価の一体化を目指していく。子どもたちにとっては、「B」となる到達基準を示すことで、目的意識や意欲を持続できるようにしていく。

【具体的な実践事例】

●児童の実態把握⇔課題解決に向けた取り組み

- ・4～5月レディネステスト（語彙・文法・漢字）で児童の現状の定着度を測る。
- ・「書くこと」における児童・教員アンケートを行い、児童・教員の課題や困りを把握する。

●校内研で研究の方向性を

- ・全教員で研究の方向性を共通理解するための校内研修を行う。
「書く」の指導（概論）

●「書くこと」に慣れ、経験を積んでいくために

- ・年間通じて実施する「読解問題プリント（よみとりちゃん）」と「作文カプリント（カクトレ）」の作成。
→週1回実施。
- ・作文・日記指導→週1回の「にっこ二小作文コーナー放送」（作文放送）を行う。
- ・「にっこ二小言葉のたからばこ」作成。→ファイルにして全学年に配布。作文指導に活用。
- ・各学年の実態に合わせて「書き技」をためていく。

●相互参観

・学期に1回、相互参観を実施。研究テーマに関して、授業内で意識していることや、授業で見てほしい点を事前にグループメンバーに知らせて、参観後交流をしている。

●国語の授業づくり

・逆向き設計した『単元計画シート』を用いての授業づくりを行う。ことでより焦点化した話し合いができる。

「つきたい力」と「ゴールの単元計画」を焦点化し、そこから逆向き思考でどんな授業計画がいいのかを考えるためのツールとして活用している。「教科横断的な視点」や「教科の他領域や他の単元との系統性を意識」し、「悩んでいる点・こうしたいと思っている点」などを書くスペースもあり、「単元計画シート」を活用することでより焦点化した話し合いができる。

・「書く活動」における『授業改善シート』の活用をし、授業を再構築していく。

書く過程（見通し⇔題材の設定等⇔構成の検討⇔考えの形成・記述⇔推敲⇔共有）を意識し、書きたくない子・書くことがない子・書き方が分からない子へなど、子どもたちの課題を解決するための具体的な手立てや支援方法を考えるツールとして活用している。

●研究授業・研究協議会

・ユニット研修でPDCAサイクルを回して、研究授業を行う。（事前・本時・事後授業を通じて、授業改善を行う）学力向上アドバイザーより指導助言をもらい、で授業改善をしている。

事前授業から参観し合い、学力向上アドバイザー参加のもと協議を重ね、「単元計画シート」「授業改善シート」をもとに指導計画や指導案の改善を行っている。授業後には、発問、板書、ワークシートなど子どもたちの発言や様子などから授業改善している。チャレンジ→チェック→チェンジを繰り返し、バージョン

ンアップしていくことで、自分事として研究授業に参加していく姿がある。

◎これからの取組

国語の問題では、図表・グラフ等の資料から情報を読み取り、目的や意図に応じて資料を関係付けて活用し、自分の考えが伝わるように説得力のある文章を字数制限内で記述することへの課題がある。これは、様々な文章や出題方法に不慣れなことが原因の一つとして考えられる。図表・グラフ等の資料などから自分の考えをまとめ、字数制限のある文章を書くことに慣れていくための学習計画が必要である。また、記述問題の無回答児童もいたので、様々な教科の「書く活動」の中で、「書いてみよう」という意欲を持たせ、「書けた!」という成功体験を積んでいくことも大切であるとする。

今後の課題としては、図や表やグラフ、短い文章、会話文等の内容を関連付けて「正しく捉える力」それらをもとに「論理的に考える力」「新たな課題を見つける力」「自分の考えをまとめて、伝える力」など子どもたちの情報活用能力を育てていく必要がある。書く活動を軸とした「国語の授業づくり」の中でどのようにそれらの力を身に付けさせていくか考えていきたい。

今後も、「書くこと」を軸にした『国語の授業づくり』を通して、何をどのようにすれば、どのような力が付くのかを子どもたちと共通理解しておくことで、学習への目的や必要性を子どもたち自身が感じられるようにしていきたい。そのために、子どもたちと「学習計画」を立て、学習のゴールまでの課程をイメージさせていきたい。

また、子どもたちが目的意識や意欲を持ち続けていけるようにするために、到達度基準を提示していきたい。「B」となる子どもの姿を本時の目標（本時の評価基準B）に対応させて設定する。子どもたち全員が達成できることをめざして、さらなる手立ての具体を検討していきたい。「A」となる子どもの姿を設定する際は、「学習指導要領」の「各学年の内容」に多くのヒントが示されているので、指導上重要となる点などを踏まえて設定していく。

さらに、自分の考えを述べ、そう思った根拠挙げ関連付けて書く活動も意識していきたい。そして、国語科で、自分自身の成長を実感できるように丁寧な指導をしながら、「書くこと」に挑戦し続けていける子どもたちを育てていきたい。そして、友だちから質問や助言を受ける場を設定したり、互いのよさについて伝え合わせたりすることで、学んだことを客観的に確認させるとともに、次の学習への意欲を喚起させるような共有の場を設定し、「やってよかった」「書いてよかった」「またやってみたい」と感じられるようにしていきたい。

「自分の考えを豊かに表現すること」に少しでも自信をもてるようにしたい。また、「単元のつきたい力」「単元のゴールの言語活動」を明確にし、子どもたちがその単元で何を学び、何がゴールなのかをイメージし、どんなことが身に付いたかを実感させるような活動をしていけるように逆向き設計で授業づくりをしていきたい。また、大阪府教育センターの指導主事の先生、学力向上アドバイザー、教育委員会の指導主事の先生にご指導やアドバイスを受けながら、子どもたちが自分の考えを持ち、生き生きと仲間と議論したり共有したりしながら、自分の考えを広げ深めるよう、研究を行っていきたい。そして、本校の児童のよさをさらにぐんぐんのばし、課題点をよさに転換していけるよう研究、教職員が全員で一歩成長できる研究をめざしていきたい。